

<派遣報告書>

報告者 大村谷 菜々

1. 大会名 2025 年度 第 6 回全国 U15 バスケットボール選手権大会
2. 期間 令和 8 年 1 月 4 日（日） ～ 6 日（火）
3. 会場 武蔵野の森総合スポーツプラザ
4. 派遣者 大村谷菜々 以上 1 名
5. 担当試合
 - ① 1 月 4 日 第 2 試合 サザンギャルズ 1031（栃木） - 仙台市立五橋中（宮城）
 - ② 1 月 5 日 第 3 試合 八王子市立第一中（東京_1） - 比治山女子中（広島）
 - ③ 1 月 6 日 第 1 試合 京都精華学園中（京都） - ONE（静岡_1）
6. GAME
 - ① サザンギャルズ 1031（栃木） - 仙台市立五橋中（宮城）

CC：下島（神奈川） U1：加瀬（東京） U2：大村谷

 - ・ PGC
 - チーム情報の共有
 - メカニクスの確認（エッジの見方、プレス DF 時の C の対応）
 - ローテーションについて（積極的にボールサイド 2、助けに行く意識）
 - ・ 内容

PGC では両チームのキーマンとなる選手を把握しながら、自分のプライマリで起こったことに対してシンプルに判定を続けていくことや、積極的にローテーションを行い、メカが重くならないようにする意識を共有しゲームに臨んだ。

サザンギャルズは 170cm 台の U14 代表選手を擁しており、彼女がキーマンとなりインサイドでのプレーが多く展開された。五橋中もサイズのある選手が在籍しており、オフボールのポジション争いやリバウンド時の手や体の使い方に特に気をつける必要があったが、前半はローテーションのタイミングに迷ってしまい、L からアングルがとれずセカンダリで助けていただいた場面があった。プレーの特徴をもっと早く掴み、展開を予測してポジショニングを行うべきであった。

ハーフタイムでクルーとコミュニケーションをとり、後半は少し修正できたが、やはりゲーム後に振り返ると「あの場面はローテーションをしても良かった」とお互いに感じていたところがあった。全国の高いレベルのゲームを担当するにあたり、もっとチャレンジが必要な部分であったと反省。

またテンポセットとなる前半で、全国大会であまり軽い笛を入れないようにと意識するあまり、笛を入れても良かった場面でコールすることができなかった。

どんなゲームにしていきたいか、このゲームではどんなことに笛を入れるべきかといったことをもっと自分の中ではっきり持ち、それを選手や周囲に伝えられるレフェリングを意識すべきであると痛感した。

- ・ MTG 岡氏（栃木県）

CC を中心にテンポセットを行い、悪い手に継続して笛が入っていた。

無理をしてファウルを見つけに行く必要はないが、もう少し前半は笛を入れても良い場面があった。

POC にももう少しこだわると説得力が増して判定精度にもつながると思う。

- ② 八王子市立第一中（東京_1） - 比治山女子中（広島）

CC：小笠原（北海道） U1：山越（千葉） U2：大村谷

- ・ PGC

チーム情報の共有

基本的なメカニクスの確認

ヘッドコーチとのコミュニケーションについて

- ・ 内容

八王子市立第一中が終始リードを握るゲーム展開となったが、サイズのある選手が多く在籍する八王子第一中に対し、比治山女子はそれに負けないフィジカルとスピードで対抗し、最後まで前を向いて走り続けたゲームだった。両チームともスピード感のあるプレーを展開し、ゲーム自体は淡々と進んでいった。その中で必要なものにシンプルに笛が入れられていた印象だった。

序盤で私が U1 へ OOB のヘルプを求める場面があった。ゲームの入りでこういったバイオレーションはきちんと当たり前に取り上げるべきであり、選手の動きの予測が不足していたことを痛感した。

L にいるときのショットファウルで 2 回ほど C とダブルホイッスルになってしまったところがあったが、アイコンタクトでプライマリテイクにすることができた。1 つは私のプライマリだったがもう一つは映像で確認するとギリギリ C のように思えるところだった。アングルやプライマリに関して、どこからのコールがより説得力があるのか、そのためにどこにポジショニングすべきかを改めて理解し、もっとこだわっていく必要があると感じた。

- ・ MTG 吉田氏（島根県）

起こった現象に対してプライマリのレフェリーがきちんとコールできていた。ほとんどシングルホイッスルで、お互いのプライマリをよく理解して判定を任せられて

いた印象だった。

OOB のところに関して、大きな取りこぼしやビッグインパクトがあまりなく、スムーズに進行した試合だからこそこういったところが目立ってしまうので気をつけるべき。

③ 京都精華学園中（京都） - ONE（静岡_1）

CC：白川（石川） U1：石川（大阪） U2：大村谷

・PGC

チーム情報の確認、共有

キーマンとなる留学生への対応の仕方

ベンチコントロール

・内容

昨年度優勝チームを OT までもつれ込ませた、今大会でも注目度の高いゲームであった。やはりポイントとなったのは留学生に対するマッチアップのところで、オフボール時に起こっていることをきちんと把握し、彼女のインテンシティが上がりすぎないようにコントロールすることがこの試合を円滑に進める鍵だったと思う。TO やクォーター間には彼女の様子や相手の DF のしかたの変化について細かくコミュニケーションをとり、役割分担をしっかりと確認しながら進めたため、必要なところに笛が入り、緊迫したゲーム展開ながらも安心感を持ちながらレフェリングができた。

ONE は留学生に対して無駄なファウルをしないように非常に気をつけていることが伝わる DF だった。しかしやはりポストアップ時の体の寄せ方や手の使い方は留学生が嫌がる素振りをする場面もあった。特別大きなアクションがあったわけではないが、私のプライマリでも笛を入れて整理できた場面があったかもしれない、もっとクリーンにプレーさせることができたのではと反省。DF の作戦や意図を汲みながらも「ここからはダメ」を示せるようにしたい。

留学生以外の部分でも、イリーガルスクリンやカットインに対して DF が手を使った守り方をしたときなど、特に C にいるときの判定が弱く、ポジションアジャストやプレーの予測をもっと追及して行く必要があると痛感した。

・MTG 浦氏（東京都）

ハードなゲーム展開の中で、3 人が協力して判定を下せていたのではないと思う。留学生が嫌がる悪い手の使い方や体の寄せ方に対して、影響のあったところにきちんと笛が入ったことでトラブルを防ぎ、スムーズな展開ができていた。

ドライブやアタックに関しても吹き急ぐことなく、必要なところに判定が下ること

でタフなプレーを引き出しており、大変見ごたえのあるゲームだった。
判定が難しい場面で、助けられたと感じたケースもあったと思うが、今後に繋がる
良い材料となると思うのでぜひ活かしてほしい。

7. 所感

今回、県外での全国大会に初めて参加させていただきました。昨年夏に開催された鹿児島全中とはまた違った雰囲気、3年生の「これで本当に中学最後だ」という気概や思い入れをひしひしとを感じるゲームばかりでした。

大きな会場やトップレベルのプレーに圧倒され正直緊張していましたが、PGCの前からクルーの皆さんとお話をさせていただいたり、ゲーム中にコミュニケーションを綿密にとっていただいたりしたおかげで日ごとに雰囲気になじむことができました。今回、レフェリング技術はもちろんですが、クルーを信頼して協力することと、前述にもあるコミュニケーションの重要性を改めて学ばせていただきました。

ほとんどの方が初対面で、年齢もライセンスも経験値も違う3人でゲームを進めるのはどんな感じだろうと不安でしたが、どの試合もCCの方を中心にたくさん会話をし、情報や方向性を常に共有することでクルーとしてもゲームもまとまっていき、反省点も多くありましたが試合後には不思議と達成感がありました。

コミュニケーションでクルーやゲームをまとめたり引っぱりたりすることも、一つの技術として今後身に着けていきたいと感じました。

今回技術面でもコミュニケーションでも助けていただいていたばかりでしたが、この経験を活かして、今後は助ける立場になれるよう努力していきたいと思います。

最後に、派遣をご快諾いただきました原田審判委員長をはじめとする鹿児島県バスケットボール協会の皆様、大会の運営にご尽力いただきました東京都の皆様、今大会に関係されるすべての方々に感謝申し上げます。

以上、ご報告と致します。